1.

られたい〕と相互作用し、その機能を支援するのか? を含めた神経系を除外した身体一般を意味する。本書で「身体」と記されている箇所は、おおむねこの意味でとらえ たびたび「body proper」と表記している(ただしこの最初の出現箇所では「proper」はついていない)。これは、脳 情はいかに最善の意図を支援したり阻害したりするのか? なぜ、そしていかに脳は身体〔著者は 情動が生じるのか? 間の感情や情動の世界に興味を抱き、その探究に多大な時間を費やしてきた。なぜ、そしていかに や解釈を手にしている。 本書は、ある一つの関心領域と考え方に焦点を絞る。私はこれまで長く、アフェクトすなわち人 私たちはどのようにそれを感じ、感情をもとに自己を築き上げるのか?(感 私は今や、 以上の問いをめぐる新たな事実

主旨は非常に単純である。文化的な営為を促す動機、

監視役、

調整者としての役割を果たす感情

能力とともに、それを可能にする生体組織が備わることは言うまでもない。だがポイントは、 選択を答えに含めるだろう。 力である話し言葉がよくあげられる。また生物学に関心のある人は、遺伝子レベルで作用する自然 道具や実践や考えの壮大な体系を作り出すことで他の動物から自らを区別してきた。この体系には の文化という物語の幕を切って落とすためには、 「それ以外の何か」とは、動機づけに他ならない。ここで私が念頭に置いているのは、 いはない。また人間には、自然選択のプロセスと遺伝子の伝達のおかげで、 ロジーと科学が含まれる。 これまでその働きに見合うだけの注目を浴びてこなかっ 苦しみから健康、 哲学的探究、 いに対する答えとして、高度な社会性や卓越した知性とともに、 道徳体系、宗教的信念、司法制度、 快に至る感情である。 これら一連の営為は、なぜ、 知性、社会性、 言葉が、この過程に重要な役割を果たしている点に疑 それ以外の何かが必要になるということだ。 政治的な権力による支配、経済制度、 そしてい 人類は、集合的に文化と呼ばれる、 かにして始まったのだろうか? 人間の心が備える重要な能 文化的な発明に必要な とりわ テク この け痛 人間

12

性の競技会として始まったのではなく、 この感情には共感から生じたと考えられる思いやりが含まれ、 こされる痛みや苦しみへの対応という形で始まった。 とは対極をなす。 るテク 人間の文化的営為のなかで、もっとも重要なものの一つである医学を取り上げよう。 ノロジーと科学の統合は、身体的な外傷から感染、 医学は、 病気の診断という難題や、生理学的な謎を解くために知恵を競い 患者や医師が特定の感情を経験することで生まれたのだ。 痛みや苦しみは幸福、快、 さらにはがんに至る疾病によって引き起 その種の動機は今日でも残存 繁栄の見通しなど 医学におけ してい 合う知

性は、 努力を、動機、監視役、 それらはまさに感情に他ならない。がんやアル るのである。製薬会社や医療機器メーカーの、 機が存在する。それに重要な役割を果たしている技術者や科学者は、そのような動機に促されてい 効率的な麻酔や精密医療機器などの医療技術の発達の背後には、不快な感情を管理しようとする動 たとえばアフリカにおけるマラリアの治療や、 いる感情を考慮せずに、その理由を理解することは不可能である。言葉、 というのも、 ルなどを、西洋文化はそれほど熱心に行なっていないが、それを動機づけたり抑制したりして の追求は、進歩や名誉に対する欲求、あるいは貪欲など、さまざまな願望に炊きつけら それら複雑なプロセスの主たる発明家であり、実行者である。 結果をチェックし、 科医に歯を治してもらって痛みがひいた経験を思い出 消費者は苦痛の緩和というニーズを持ち、企業はそれに応じようとするからだ。 調整者として作用する感情抜きに理解することはできない。さらにいえば、 必要な調整を行なう役割を果たしているのは感情なのだ。 ツハイマー病の治療方法を見つけようとする熱心な 利益を得ようとする動機も、大きな部分を占めてい あらゆるところで猖獗している薬物中毒 せない人などほとんどいな しかし、それらの営為を動機 社会性、 知識、そして理 いだろう。 0 コント れる。

とことでい 用の て持つ葛藤や矛盾を真に理解したければ、 両方を認識しておか えば、 文化的 な営 ねばならな るは感情に起源を持 感情と理性のあいだの有益な相互作用と、有害な感情と理性のあいだの有益な相互作用と、有害な

たパターンを見抜く感受性を持つ芸術家らによる貢献はもちろん、生物学のさまざまな分野の 者にして犯罪者、慈愛にあふれる地球の主人にして地球の破壊を企むモンスターなどといったもの が必要になる。 同時になり得るのか? かにして人間は、受難者、托鉢修道士、喜びを寿ぐ者、博愛主義者、 この問いに答えるには、歴史家や社会学者、 そして人間ドラマの隠れ 芸術家にして科学者、 知見

る方法を探究してきた。この結びつきを確立するためには、進化の長い歴史のなかで、これら一 会を形成してきた現代の人類の生命を、早くも三八億年前には存在していた太古の生命に結びつけ きたことを論じるにあたり、私は、心、 の不可欠の能力が出現し発達した順序と経緯を明確にする必要があった。 感情が、文化の最初の火花を飛び散らせたばかりでなく、 感情、意識、記憶、言葉、創造的な知性を備え、複雑な社 引き続きその発展に重要な貢献 をして

と私が呼ぶ華麗な道具の構築をめぐって従来考えられていた概念とは一致しない。 かく ルが示すとおり実に意外なものであった。生命の歴史におけるできごとの経緯は、 して私が見出した、生物学的な構造と能力の出現順序は、従来の見方とは異なり、 文化的な心 本書のタ

私たちの考えが が持つ感情の本性と影響に関するストーリーを語ろうとしたとき、 おける知的な振る舞 生物学的な現実に即していないことに気づいた。 かいが、 神経系に支援された先見の明、 熟慮、 私たちは、 複雑性に由来すると想定し 私は、 生物が見せる、 心や文化に対する

現実を指して「意外な」と表現するのは、まだまだなまぬるい。 細胞生物が備えていた簡素な装置にその起源を持つ可能性があることは、 しかしその種の振る舞いが、生物圏の夜明けの時代に存在していたバクテリアのような単 今や明らかである。

中心的なテーマをなすが、その力はホメオスタシスに由来するのである。 る心は、人間性のもっとも顕著な現われである文化や文明をもたらした。 機能的な糸と見なすことができる。この協調関係は意識の出現をもたらし、かくして生まれた感じ 護のもとで作用するホメオスタシスは、初期の生物を、身体と神経系の並外れた協調関係 ズムそれ自体と、その調節の条件、すなわち一般に「ホメオスタシス(恒常性)」という一語で言 その種の直感に反する発見に見合った説明を構想することは可能だ。 らもろもろの現象の集合に基づく。感情とはホメオスタシスの心的な表現であり、感情の庇 この説明は、 このように感情は本書 生命の へと導く メカニ

セスの人間化を促進することにつながる。 文化を感情やホメオスタシスに結びつけることは、文化と自然の結びつきを強め、 た遺伝的な選択が顕著な役割を果たす非常に長い過程を通じて形成された。文化を感情、 つつある昨今の傾向への対抗手段になる。 遺伝に結びつけることは、 文化的な考え、 感情と文化的、 実践、 創造的な心は、ホメオスタシスによって 道具が、 生命活動のプロ 文化的 セ なプロ ス か

私は何 セスのあらゆる側面を科学で説明しようと試みているのでもない。 この結びつきが 文化的な現象を生物学的な起源に還元しようとしているのでもなければ、文化的なプロ 文化が歴史を通じて獲得してきた自律性を損なうものでないことは明 芸術や人文学的な知見なくして、 5 か だ。

はじめに

科学のみによって人間の経験の全体像を描こうとしても、 何の成果も上がらないだろう。

動はたいてい、 動を自律的で文化的な現象に由来するものとして、また他方の見方は、遺伝によって受け継がれる 自然選択の結果としてとらえる。 文化の形成をめぐる議論は、対立する二つの見解の争いになりやすい。 比率や順序こそ異なっても両者の影響を受けているのだから。としてとらえる。しかし、いずれか一方の見解を絶対視する必要はない。 一方の見方は、 人間の行 人間の行

しない。 された記憶を背景に、 文化 の起源を人間以外の動物の生物学的構造に見出しても、 人類の例外的な地位は、 苦しんだり繁栄したりする、 過去の記憶や、 私たちが絶えず予期している未来をめぐっ 人類が持つ独自性に由来するのである。 人類の例外的な地位を損な 2 たりは て構築

3

るも 目を向け、 きはよくなかったり、 の際、語りの内容が、起源の物語の格好のテーマである策略 生来の語り手たる私たち人類は、 のであれば、受けること請け合いだ。 たはずはない。 今や古典となった『生命とは何 社会的な行動や文化が最初に出現したのはい しばしば間違っていたりする。 ベル賞を受賞した物理学者エル 起源をめぐるスト しかし自然界について語ろうとすると、スト か』を著したが、 生命は つか? リーを語ることに強 ヴィン・ そのタイト や いかにして始まったのか? 愛情、 その種の事象が、 シュ レー 友情などの人間関係に関す ルを『生命の起源』とはし ディンガーは生物学に い満足を覚える。 V とも簡単に 心や感情 IJ ーので

ンス、 してい や怖れや怒りと、 来を想像する心の形成の背後にある事実や、心と外界と個々の生命が相互に結びつくことを可能に なかった点に注意してほしい。 それ 絵画、文学を発明してきた。 る、 でも、その探究には魅力がある。 感情や意識のメカニズムの背後にある事実を取り上げる。 幸福の追求の矛盾を調和させようとして、人類は畏怖や驚異に注目し、 彼は、その探究が徒労に終わるであろうことを見越していたのだ。 本書は、 思考し、 物語と意味を生み、 葛藤する心に対処し、 過去を思い出 音楽、 苦しみ į ダ

ときに を通じて続けられるこれらの営みは、 そして宗教的信念、 の一部なのである。 すり切れ た叙事詩を生み出すことで、 哲学的探究、 政治的ガバ 文化的な心が人間ドラマに取り組むために用いてきた数々の その努力を継続している。 ナンスなどの名称で通用して ゆりかごから墓場まで一生 いる、 ときに美しく、